

朝、五郎はおばがひきとめるのも聞かず、昨夜からの大雨の中を若松城下のわが家へ帰るため、下男げなんの留吉とめきちと一緒に面川沢を出ました。手にはきのう拾い集めたきのこや栗をつめたかごを下げて、どろんこの坂道を急ぎました。

つつみさわむら提沢村の北口にさしかかったとき、城下から命からがら逃げてきた難民に出会いました。ずぶぬれの難民なんみんは道路いっぱいにあふれて、すべて南の方へ向い、若松城下の方へ行くのは五郎と留吉だけでした。

「どちらさまの小だんなかは存じませんが、城下はもう火の海です。それに敵兵がいっぱいで、お城のそばにも近寄れません。引き返した方がよいですよ。」

と声をかける人もありました。若松の方を見ると、もうもうとした黒煙くろけむりにつつまれてお城は見えず、わが家のあたりには真まつ赤かな火柱ひばしらがあがっていました。

「母上、母上。」とさげびながらなおも行こうとしましたが、出会う人ごとに